
捨てられたオマケと、拾った光。（仮）

MAKOTO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨てられたオマケと、拾った光。（仮）

【Zコード】

Z2649Y

【作者名】

MAKOTO

【あらすじ】

双子の姉は『勇者』として迎え入れられ、妹のわたしはオマケで見知らぬ場所に放り出された。姉と比べられ、自分は平凡（か、それ以下）。そんなわたしに手を差し伸べたのは、金色きらきらな人だった。主人公は非チート。仲間以外からの扱いや言葉は酷い部分あり。習作のため、タイトルは仮題。打ち切りエンドもありえます。

「何なのだ、お前は？！」

それがわたしに對して投げられた言葉だった。

地図と保存食、簡単な着替えと僅かなお金。
これがわたしに与えられた『旅』の仕度。
武器もない。

口クな説明もなく、見知らぬ場所に放り出された。
理由は、わたしが姉のオマケだから。姉のように、勇者の資質ど
ころか、何にも持つていなかつたから。

居ては困る。

だから追い出された。

見知らぬ世界。
通じない常識。

助けてくれる人など、誰も居なかつた。

唯一の味方だと思っていた……いや、姉すらわたしの味方でもない。手など、差し伸べてはくれない人だ。

姉とわたしは双子で、真逆の存在だった。

よくあるお話。

姉は誰からも愛される優等生。

妹は劣化版。姉を引き立てる役。

わたしという人間は、姉が居て存在価値があるらしい。

名前だって、引き立てるかのよう。

姉は七瀬朱里^{あかり}といい、名前の通り明るい人柄である。

一方で妹のわたし。七瀬里子^{さとこ}。姉が朱里だから、妹にも同じ字を使おう。そう思つてつけられたのが、この名だ。

わたしに名前を選ぶ権利はない。拒否しても仕方ないので、受け入れるしかない。

どうしてわたしは、こんなあからさまな差を持つて育てられたのだろう？

一生懸命生きていて来たけど、我慢の限界など、とうの昔に臨界点を突破している。

……突破しそぎて、逆に冷めてしまつたけど。

唯一の救いは、祖父母の存在かもしれない。それも小学校四年生までの短い間。あの時は、幸せだったかな。

誰もわたしのことを知らない世界

真の孤独とは、こんな状態なんだろう。

さて、生きるためにはどうしようか？

帰る方法が分からない以上は、ここに生きていいくしかないと、覚悟を決めるしかない……けど……。

右も左も分からぬ。

わたしは一体、どこに捨てられたのだ？

「おおー、ついに『勇者』が現れましたぞー！」

そんな歓声を、ぼんやりとする意識の中で聞いた。
頭がグラグラする。酷い乗り物酔いみたいな気分だ。
わたしの隣には、側に居ないはずの姉が居る。

「姫様、成功ですなー！」

「ええ……成功には、成功ですが…………変なオマケも、一緒にあります」

多分じゃない、間違いなくわたしに對しての言葉だ。
これまで姉と一緒に居て、わたしを褒めたりなんたりする言葉は
聞いたことがない。あるのはけなす言葉だけ。
だから、変なオマケというのは間違いなくわたしのことだ。
起き上がり、周囲を見回すと……あからさまな表情でわたしを見
ている人たちと目が合つた。
第一印象は最悪に近い。

「……これは一体、どういったことでしょう?」

「わたくしにも分かりません。ただ……」

「ただ、何でしょ「姫様?」

「顔がどことなく似ていますから、そのせいではないかと」

「…………姉妹、ですか。もしそうならば、この事態にも納得できますが…………どことなく、似ているでしょうか?」

「それは……」

そこで言葉に詰まられる。

どことなく似ている 初見でそう感じる人は少ない。

姉は髪が長く、顔立ちも整っていて、同じ年なのに『大人』だ。妹のわたしは、多分平凡。可愛いとも言われたことがないし、姉と比べてなら『ブス』と言われるくらい。

昔からそうなので、今更どう思われようと、どう言われようと傷つくような軟な精神はしていない。平気と大口は叩かないが、何も思わない。無関心。

とりあえず、言葉が通じていないフリをして、様子を見ることにしておく。

姫様と呼ばれた少女は、未だ気を失っている姉に、優しく声をかけた。

勇者様 と。

最初に『ついに勇者が現れた』と聞こえていた時点から、何となく予測はできていた。

ここは地球ではない世界。

勇者召喚というファンタジー現象によつて、姉が召喚された。わたしは巻き込まれたオマケ。

彼女たちは多分気づいていないが、わたしが巻き込まれた原因は、姉と双子だからだろう。

「…………あれ、ここは?」

優しく揺すり起された姉の第一声。

その視線がわたしを捉えたみたいだが、すぐに視線を逸らす。

「ここはリアントワーク王国。わたくしはハルフィニア・ハーヴィ＝リアントワークと申します。

勇者様、突然の出来事で驚かれているでしょう。まずは勇者様のお名前をお聞かせください」

「……朱里。七瀬、朱里よ」

「アカリ様……世界に光をもたらすお名前！ まさに勇者様！」

意味が分からないつ！

名前で勇者を選んだのなら、地球の日本には、『ひかり』や『ひかる』、『じうき』や『のぞみ』、『みらい』など多く居る。

「お願いします、勇者アカリ様！ わたくしたちにお力添えを

「国民を代表し、神官様である私からもお願い申し上げます」

土下座をする神官長。

普通の日本人なら、土下座をされると困ってしまう。ビックにかして頭を上げても「おう」と、

「わ、分かったわ。とりあえず、話を聞かせてもらおう」と、これから初めて頂戴

相手の望むような答えを返すしかない。

「の返答を受け、姫様とやらは満面の笑みを浮かべた。
計算高いと言つべきだろ？」

他の人たちも、それぞれ喜びやそれに近い感情を浮かべて居る。
無表情なのはわたしだけ……じゃ、ないらしい。

一人、仮頂面が居た。

金色で、きらきら……あれは、誰だったのだろう？

わたしの視界に映る金色のきらきらと、同じだったような……

次回更新日は未定です。

肺炎の一歩手前だつたらしい。

捨てられた場所で途方に暮れ、雨に打たれたのだから自業自得だ。見知らぬ部屋で気づいたわたしに、医者とは思えない無精ヒゲのおっさんが告げた。

……不思議なのは、助けてくれる人など居ないこの世界で、誰がわたしを助けたのか……という点だ。

神様が情けをかけてくれた……にしては、少しサービスが良すぎ るような。

「……気づいたようだが、調子はどうだ？」

いきなりドアが開けられたと思つたら、金色きらきらが水差しを抱えて入つて來た。

そして、体調を気にかける言葉を投げかけられる。

「大丈夫か？」

久々に聞いた言葉だ。

何年ぶりだろう？

「お、おーーー」

あまりにも久しぶりで、あまりにも嬉しくて、わたしは泣いた。

「…………大丈夫、です。心配されるの……す、ぐく、久しぶりで……

…さっきまで、不安だつたから

「王族の胸くそ悪い態度のことだな。すまなかつた。オレがもう少し早く出られれば良かつたのだが」

「……意味が分からんんですけど」

「ん？ ああ、やうか。では、順を追つて説明しよう。質問はその都度、受け付ける」

と書いた金色きらきらにて、最初の質問を投げかける。

「えつと……アナタは誰ですか？」

田を見開いて、次にはフイた。
肝心の血口紹介を忘れていたと、きらきらは名乗る。

「ユキ、だ。ユキ・クロスロード。一応、『光魔剣士』という通り名があるが……そう呼ばれるのは好きじゃない。
それじゃあ、オレからも一つ尋ねる。キミの名は？」

尋ねられ、どうしようかと迷う。

本名を名乗つても、多分大丈夫だろ？。だけど、姉との繋がりがあると知られた時が、怖かつたりする。
その時は、運がなかつたことで諦めるしかない。
独りは慣れっこだ。

「……七瀬、里子」

「ナナセ？ 召喚された勇者もナナセと言つていたが

「似てないけど、あつちは双子の姉です」

「なるほど。納得した。どうやらオレの勘は正しかったようだ」

「え？」

「いや、気にするな。オレ自身の問題だ」

だから気にするなと一回も言われてしまえば、気になりつつも頷くしかない。

金色きらめきとユキさんは咳払いをし、姿勢を正して本題に入つた。

何でも、世界は今、魔王の危機に晒されているとかで。かつてリアントウーク王国は『勇者召喚』を行い、魔王の脅威を退けた伝説を持つてゐるそうだ。

条件が揃つた日、あの場所に集まつた面子は、勇者に縁のある血筋か、勇者に同行できる力量を持つた名のある人物か、神の啓示とやらを受けた人間のどれかとのこと。

ユキは一番田と三番田の理由を持つてしまつたがために、あの場に居合わせたと言つた。

勇者の資質を持っているのは、やはり姉だ。わたしはと言つと、承諾した姉が立ち去つた後、散々罵られたらしい。その辺の記憶がないのは、記憶しないようにと心が無意識に閉ざされたのだと思つ。わたしの自己防衛本能とでも言つておこう。

無反応なのをいいことに、神官たちはわたしを馬車に押し込み、人里離れた場所に捨てた。これがわたしの身に起こつた一連の流れだつた。ユキさんは隙を見て場を去り、わたしを追いかけたそうだ。

「はい、質問です。過去に『勇者召喚』を行い、魔王を退けた。じゃあ、その後の勇者はどうなりました？」

「……聞かれるだらうと思つた。史実によると、その後も勇者は世界に留まり、魔王封印まで戦い続けたとある。いや、とど悪ざるを得ないと言つべきか。

実はあの場に居合わせた者の中に、勇者に縁のある血筋の知り合いが居る。そいつが持つ史実には、歴代の勇者は皆、帰還していくとある。

つまりは、魔王を倒せず帰還できなかつたか、帰還せざる方法がなかつたかの理由が考えられる

それを聞いて、わたしは『やつぱりそつなんだ』と思つた。大抵は、召喚して終わり。たとえ失敗した召喚でも、還すことはできないのだらう。

わたしがこの世界に居る理由

もしも不要なら、元の世界に返し返せばいいだけなの、それがない。ユキさんの言つていた推測、後者が正解のようだ。

「…………わたし、これからどうすればいいのでしょうか？　言葉は通じているようだけど、さうと字は読めないし……何より、戦えない」

「そんなの当たり前だ」

「あ……やつ、ですよね」

はつきり告げられた言葉が、重く圧し掛かる。

俯いたわたしに、ユキさんが慌てて言葉を付け足した。

「当たり前と言つのは、人間、いきなり戦える訳がないといつ意味だ。努力を積み重ねることで、初めて一匹の魔物を倒すことができる。オレも例外じゃない。キミも努力すれば、戦える」

「努力で報われるなら…………いや、それ以上思つのはやめておこう。

ユキさんの言い分は多分、本当に努力を積み重ねてきたから言ふたのだね。

何か一つ、わたしも報われたい。そつ願つことせ、ワガママなんかかな？

「もし、キミに旅立つ意思があるのなら…………この？本？を持つて、身支度を整えて欲しい。

嫌なら留まり、平穀に暮らすも好し。この村はリアントワーク国内ではない。ある程度の安全は保障できる」

差し出された本は、空色のハードカバー。ユキさんの瞳の色。本とは言つけど、カバーの材質が水晶のような気がする。持つてみると、見た目よりも軽かつた。

「この本……開かない？」

「今まだ開かない。いや、開けないと言つのが正しいな。

精靈石で作られたその本は白紙の状態だ。キミはこの本と『契約』することで開かれ、呪文を刻んでいく。習得した証を刻むことにより、努力が証明される。

何を学び、習得し、刻むかは契約者の意思次第。だからもし、キ

「ミに旅立つ意思があるのなら、オレと共に歩もう」

胸に、小さな棘が刺さったような痛みを感じた。
辛いのではない。後ろめたいのではない。

「こんなわたしでいいの？」

差し伸べられた暖かさに、胸が痛いのだ。

「…………わたし、何にもできない異界人です」

「知っている」

「…………わたし、途中で挫けそうになることもあります」

「人は皆、同じ挫折を味わう。気にするな」

「足、引っ張つてもいいのですか？」

「いいんだ。オレはキミの味方だ。この手は、何度だって差し伸べ
てやる」

言つて、手を差し伸べてくる。
優しく、微笑んで。

「オレの勇者はキミだ」

2話（後書き）

予定よりも早く1話分書きあがつたので更新です。
登場人物については追々。

苦節一ヶ月。

「赤靈^{せきれい}、集いしは我が情熱

フェルドー！」

本を左手に。
かざした右手から、野球ボールくらいの火炎が生まれた。
ようやく安定して発動させることができた、魔法使い初級の呪文。
嬉しさのあまり、『やつたー』と大声を出してはしゃいだ。

「成功率1パーセントだった頃が懐かしいよ」

ちなみに一十五日前の話だ。

この世界の一月は三十日と決まっている。一年は地球と同じく十
一ヶ月だが、五日少ない三百六十日になつていて。

ユキ（さん付けと敬語は禁止された）から魔法の基礎を学び、学
科を学びながら実技に入ったのが、成功率1パーセントの頃だ。
本格的に実技に入つたのは、学び始めて十日　最初の失敗から
五日後のことだった。

十回に一回の成功から、少しずつ成功率を上げ……今日、ようや
く百パーセントにすることができた。

この世界の一般的と比べると、ものすごく遅い部類に入るそうだ。
早い人では五歳で基礎を学び、一週間から一十日内には初級を使え
ているとのこと。

心配していた文字のことが、驚いたことに、見たらすぐに読め

てしまつた。召喚された際の特典だらうか？

読めるし、書ける。学科に入るのはあと一月もかかると思つていた所の幸運だつた。

「キミの努力が実つた証拠だ」

そう言つて、ユキは笑つ。

一緒に喜んでくれる人が居るという現実は、何だかくすぐつたい感じだけど、嬉しい。

……昔、テストで百点を取つた時、喜んでくれた祖父母もこんな笑い方をしてくれた。

記憶の底に沈んでいたモノが、ユキの差し伸べてくれた手が救い上げてくれるような気がした。

「初級である四属性の一つを覚えることで、人が持つ魔力の扉が少しずつ開かれる。あとは扉の開放率により、使える術の階級も上がつていく」

「それも努力の積み重ね、だね」

「ああ。だが、覚える術は気をつけて選ばないとだめだ。特に、精靈石の本に術を刻む場合は……だ」

「刻んだ術は消すことができない　術に触れる度、何度も思い返すよ」

手にした精靈石の本

この本と契約をしたわたしに、最初にユキが忠告したことだつた。ページ数は持つものによつて上限が変わる。成長によつては増える場合もあるらしいが、大抵は初期ページのままらしい。

わたしのページ数は十五。初級　　わたしの場合は フィルド
は必ず覚えなければならない術のため、残り十四ページ。
覚えたいのはユキをサポートできる補助と回復、同じ場所に立つ
て戦いたいから、攻撃も少し。

現存する魔法を知れば知るほど、どれも必要な気がして田移りし
てします。

この十五というページ数は、精霊石の本を扱う者としては多い方
になるらしい。

ユキが持つた場合、推測では六ページくらいじゃないかと言つて
いた。理由は、得意とする属性術が少ないから……だ。

魔法を学ぶ上で、最初に出てくるのは人に備わった属性だった。
彼は『光魔剣士』という通り名のごとく、光属性を持っていた。
滅多に居ない属性のため、魔法数は少ない。覚えた初級は四属性で
はなく光、明かりを灯す　ライト。

「今、ふと思つたんだけど……精霊石の本って、実は結構貴重だつ
たしりて？」

刻んだら消せない欠点をと、少し重くて不便な部分を除けば、な
かなかいいアイテムだと思つ。

「…………まあ、なんて言えばいいのか……「ん」

「」

気にして欲しくなかつたのか？

「……精霊石自体、希少価値のある物だ。この本をくれた奴は、世
界で最後の一冊と言つていたか……何も言わず、説明だけで有
耶無耶にしようかと」

そう言われ、

「あー、納得。うん、全然気にしないよ? むしろ、ありがと!」
すんなりと、受け入れられた。
それから心の中で、本をくれたと言つ顔も名前も知らない人にも
お礼を言つておく。
この本がなかつたら、わたしは何もできないうままだった。

「……そう言つてもうえると、救われる。オレからも、ありがとう
リ!」

苦笑しながら、頭を撫でる。

リ!とは、わたしの名前。里子さとこではなく里子りこにしたのは、新しい
自分を始めるため……かもしれない。

本当は、祖父母が呼んでいた秘密の名前だつたりする。

けどそれは、わたしだけの秘密にしておこう。

ユキと出合つて一月が過ぎた。

わたしは未だ、助けてもらつた村に滞在している。世界のことを
中心に、常識を身につけるためだ。

魔法を覚えてようやく一步、進めたよつた氣きがするけど、まだま
だ『外への一步』は踏み出せそうにない。

一緒に召喚されてこつらうのも悪いけど、魔者となつた姉には一
日でも早く、世界を平和にしてもりたいな……なんて。

わたしは七瀬里子。

だけど、リコ・セブンス……それがこの世界を歩む、今のわたしの名だ。

コキとの出会いで少し、前向きになりました。
姉側の動き等は追々。

勇者に縁のある血筋か、勇者に同行できる力量を持つた名のある人物か、神の啓示とやらを受けた人間この三つに共通するのは光。

一番分かりやすく言えば、金髪。特に一つ目に当たるそうだ。そういえば、姫様と呼ばれた人も、少し色素の足りない感じの金髪だった。ユキのよう、さらさらはしていない。

世界の平均は茶色とグレー。黒はそれほど珍しい色ではないため、特に目立つことはないだろうとこいつ話だ。

「じゃあ、どうやって『勇者』だって証明するの？」

姉も黒髪で黒目。分かりやすい金ではない。

「金の装飾を使い、王宮が『勇者』であると公言する。王の言葉は絶対であるため、アレは『勇者』として存在することになる

「…………趣味、悪そうね」

装飾された姉を想像してみる。

きつと頭には、金のムダに派手な髪飾りでもつけられるのだろう。服かマントには金の刺繡。

ゴテゴテしていた。

どこの成金ですか？

「……とにかく、待ち合わせしている人って、どんな人なの?」

「オレと同じく、二つの理由を持つてしまった男だ。王宮で再開し、その時に精霊石の本を譲られた」

「え? 王宮に居たってことは……」

「いや、キミは会っていない。ソノガ亞麻喫される前に、少し問題があつて……そいつは城を追い出された」

「……わたしと、同じ?」

「半分は、な」

と、タイミングを狙つたかのよう、部屋の戸が叩かれる。
きつちり四回。

ユキには訪問者が分かつてゐるらしく、『開いている』とだけ答えた。

入ってきたのは、夜を思わせる髪と、琥珀色の瞳をした青年（おそらく、ユキより年上）だ。

「駆け落ちとは感心せぬな」

それが、彼の第一声だった。

挨拶抜き。

反応に困っているわたしは、ただポカンとしているだけ。
言つた当人は、なぜか頬を赤らめる。それは恥ずかしいのだなど、思つた。

「…………」ついに悪気はない。『ディオの精一杯のボケだ』

「え？」

ようやく意味が分かった。

勇者の仲間候補として城に行つたはずが、見知らぬ女と一緒に暮らしている。それを駆け落ちと思ったのか。そんな風に、見えたんだ。

「……ふつ、ふふつ」

「り、リコ？」

「あははははつ、だ、だつて、駆け落ちに見られたなんて、ふふふ
つ……ははつ」

可笑しかつた。

悪い意味じゃなく、楽しい意味で。

だから笑つた。腹の底から声を出し、笑つた。

十年振りくらいかな？

涙が出るほど可笑しくて笑つて……ボロボロと泣いていた。

そこから先は、ただ声を上げて泣いた。

5話（前書き）

評価、お気に入り登録、ありがとうございます。

欠けていた何かが、戻つていくよくな……？わたし？が満たされ
ていく気がする。

泣いていた間、ユキはずつと手を握つてくれていた。
嬉しいやら恥ずかしいやら、情けないやら。
そしてわたしは、あと何回泣けばいいのだろう？
擦つた目が痛かった。

「…………ユキ、いつからお主は女子おなじを泣かす男おのになつておつたの
だ？」

ジロリとユキを睨んだ青年は、『ディオル・エクスト』と名ないで、
先に聞いていた二つの理由を持ちながら追い出された人だ。
彼は『風魔弓士』の異名があるらしいが、そこはユキと同じく呼
ばれたくないらしい。

気軽にディオルと呼んでくれと言われた。

「キミも、意図してボケるクセは相変わらずだな。

で、今回ほんなん問題を起こしたんだ？」

「某を問題児である言つ回しは止むなか」

「……とにかくとは、今回は発言が引き金になつていないと?」

「つむ。神官長と対峙際、最低限の礼節を述べた。しかし何故か、『貴方の言葉は醜いですわ』と姫が言い出しあつてから」

「追い出された、と。なるほど、キミの話し方は文化独特のクセみたいなもの。理解されなかつたんだな」

ディオルの国の文化を聞くと、何だか日本に近い気がする。言葉遣いも、時代劇で聞くよつた言い方だ。

方言という言い方は、何だか悪い気がした。日本の場合、時代によつて移り変わつただけで、未だ残つている。

「しかし、である。年端も行かぬ女子を放置するなど、聖女、聖王國とは到底呼べぬ。腹黒姫、暗黒帝国が相應しからう」

「けど、あの反応つていかにも貴族、王族つて感じだつたから……わたしからすると、当たり前かなつて」

言つと、ディオルはわたしの両肩を掴み、

「断固として、否定するー」

と言つた。

多分それは、あの国特有のものであつて、他国は違うという弁明だ。

一緒にされたくない、思われたくない。
気持ちは、十分に分かる。

「……分かつた。俺様主義は召喚した国だけつて認識しておくから。

それより、ユキとディオルが待ち合わせて、これからどうするの?
?」

どうして待ち合わせることになったのか、そう言えば聞いていた
かった。

「元々、ディオと共に『勇者』を見極めるつもりで、城で合流する
はずだったが……」

追い出された、と。

そしてわたしも追い出されることになった。
ユキにしてみれば、予想外のことばかりだつただろう。

「ディオには、リコを保護してからハトを飛ばした。居場所が真逆
であつたため、合流に時間がかかった」と言つ訳だ」

方向音痴め、と呟いた声は聞き間違いではない。
真面目なユキもと、正反対みたいだ。

「うむ。気づけば何故か、道がはぐれるのだ。方角を示す針も、ぐ
るぐる回つある」

確かめよと差し出された方位磁石（のような物）は、ぐるぐる忙
しそうに回つていた。

わたしが持てば正常になるが、ディオルに近づけると回る。
彼自身の磁場とでも言つのかな、それが狂つているのか、それと
も強いのか。

一つだけ分かるのは、このせいで方向音痴になっている可能性が
あるということだ。

方向音痴の人の理由は、もしかして方位感覚が狂わされているか

「…………かな。

「 話を戻すが、構わぬか？

結論から申す。某は『勇者』となつと者を見ておらぬ。故に、某の直感は何も告げぬ

はつきつ言つたティオルに、コキはやはづかと返した。
言葉はざこか、落胆してくる。

「えーっと、やつぱりわたしつて『オマケ』だよね？」

「こや。某はやつは思わぬ。コキの直感は正しかり」とを叫びてゐる
とも言えよ。

少なからず、『勇者』の資質を持ち得ていたからこそ、共に召喚
されたと考えることもできよつ

「…………双子だから、なか？」

「ならばコキは、片割れにも感じたであら」

「…………」「あん、理解できない」

ギブアップ宣言。

そもそも、コキのこともティオルのことも詳しきは知らないのだ
から、この時点では理解できるはずもない。

…………それに、そこまで頭は良くないし、察するのにも困ることも
ムリだ。

理解するには、一から順を追つて行かないと。
たとえるなら数学。どうしてその計算式になるか、どうしてその
数字になるのか、一から解かないと分からぬ。

こんなわたしだから、人の倍以上勉強しなければならなかつた。文字を覚えるのも遅かつたと聞くけど、あれは教えてくれる人（両親）が居なかつたせいだ。

一時期、発達障害じゃないと病院に連れて行かれた。思えばそれが、両親と共に出かけた最初で最後の記憶かも。

「簡単に言えば、オレとティオが持つてしまつた三番田の理由が、どちらにあつたか……その確認だ」

「三番田……神の啓示？」

「ああ。オレは間違いなくリコを『勇者』だと思った。しかしティオルは違う。もう片方を見ていないため、無反応だつた。ここまで説明で分からぬい点は？」

真っ先に挙手をする。

「二人の言つてゐることに矛盾を感じる」

今の発言ではなく、今に至るまで聞いたことに関して。

仮に、わたしたち二人資質があつたたとして、それがどうして片方にしか感じないのか。

わたしに『何なのだ？』と叫んだ神官長に対し、わたしを『勇者』と言つたユキなど。

人によつての反応が正反対で、矛盾しかない。

「……それは自覚している。なぜ そう考へても、答えはどこにもない。自分の心を信じるしかないんだ」

「史実上、召喚されし『勇者』はたつた一人。故に、二人の『勇者』

が現れ出でし時点で、既に矛盾が発生しておるのであらう。

「口、気に留める必要はない。眞実、理由はいずれ、時と共に訪れる」とある。推測や可能性等は、考へすぎるが故に無駄となる

「そう、だね」

いつか、わたしにも意味があるとこう口が、訪れるまつた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2649y/>

捨てられたオマケと、拾った光。（仮）

2011年11月23日21時45分発行